

ASSOCIAÇÃO CENTRAL NIPO-BRASILEIRA

NOTÍCIAS E INFORMAÇÕES



ブラジル特報



特集

「ブラジルの建築」

- ・ブラジル近代建築を代表する4人の名匠
- ・21世紀にむけて共に生きる事へのメッセージ
オスカー・ニーマイヤー建築
- ・環境都市クリチバの挑戦

あの町この町

サンミゲル・アルカンジヨ



一般社団法人 日本ブラジル中央協会

URL <http://nipo-brasil.org/> E-mail info@nipo-brasil.org

〒105-0004 東京都港区新橋 1-18-2 明宏ビル本館 5 階 TEL:03-3504-3866 FAX:03-3597-8008 発行人：大前孝雄／編集人：岸和田仁



世界の未来を、ブラジルとつくる。

[Business innovation-1]

旅客鉄道事業に参画、400万人の市民の足を担う。
オデブレヒト・トランスポート社と共に、都市交通インフラを整え、都市の発展に貢献。

[Business innovation-2]

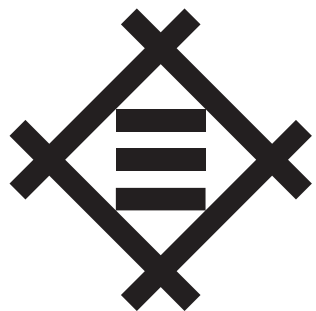
水力発電事業により、CO₂排出の少ないエネルギー開発を推進。
川の自然な流れを活かす流れ込み式水力発電事業を通じ、約1千万人分の電力を大都市圏へ供給。

[Business innovation-3]

ITを活用した教育事業で、次世代の人材育成に貢献。
オンライン教育事業のギーキー社に出資参画。一人ひとりの効果的な学びをサポート。

世界の未来を、世界とつくる。三井物産

三井物産株式会社 www.mitsui.com/jp



MITSUI & CO.

目次

(あの町この町) サンミゲル・アルカンジョ [徳久俊行]	3
(ブラジル・ナウ) ブラジル地方選挙： 政治不信と腐敗をめぐる攻防戦 [舩方周一郎]	5
【特集】ブラジルの建築 ブラジル近代建築を代表する4人の名匠 [アンドレ・コヘーア・デ・ラゴ大使]	6
【特集】ブラジルの建築 21世紀にむけて共に生きる事へのメッセージ オスカー・ニーマイヤー建築 [長谷川祐子]	8
【特集】ブラジルの建築 環境都市クリチバの挑戦 [池田敏雄]	10
連載・ブラジル現地報告 日系社会は3世へ移行しつつあるが 現役日系2世を見直し、活用すべし [鈴木雅夫]	12
(日系企業シリーズ・第43回) ロート製薬 ブラジルへの進出活動について [上島英郎]	13
(ビジネス法務の肝) ブラジルの選挙制度が示唆するもの [松田純一]	14
連載★税務の勘どころ 無申告・過少申告の海外保有財産に係る新ルール [加藤雅規／マルコ・クアドロス]	15
(連載エッセイ) 日本人移民の霊的父 ドミンゴス 中村長八神父 [青木 勲]	16
(ウーマン・アイ) デジタル時代にこそ必要なカフェ屋の主人 [唐木田真里子]	17
(ジャーナリストの旅路) 両国の架け橋に [宮ヶ迫ナンシー理沙]	17
(連載文化評論) ラテンアメリカ文学英訳の巨匠 グレゴリー・ラバッサの死 [岸和田仁]	18
最近のブラジル政治経済事情	19
新刊書紹介	20
(びっくり豆知識)「大国」はメキシコに負けてはいけない	20
協会からのお知らせ	21



写真家田中克佳の「表紙のひとこと」
「オスカー・ニーマイヤーの代表作の一つ、リオデジャネイロ郊外にあるニテロイ現代美術館。宇宙船を思わせる奇抜なデザインが、風光明媚なグアナバラ湾の自然光景と見事に融合している。」
(65年生まれ、早稲田大卒、博報堂入社。93年に退社後渡米し、独立。ニューヨーク在住。www.katsutanaka.com)

サンミゲル・アルカンジョ

サンミゲル・アルカンジョ市はサンパウロ州南西の海岸山脈上に位置し、人口3万5千人、この町の名は守護神の名前から由来している。町の設立は、田舎町としては案外古く、2015年に130年祭が行われた。またレジストロヘ下り、南のパラナ州クリチーバ市へ続く街道の宿場町として栄えたが、国道116号線や、イタペチンガとカップン・ボニートをつなぐ街道が出来てからは、サンパウロからの終点の町となり、また海岸山脈を背にした州立公園の入り口の静かな田園都市である。

バイア州、パラナ州のブドウの輸出が盛んになる前は輸出向けのイタリア・ブドウ生産も盛んだった町として栄え、それ以前にはコチア青年のイモ作りで賑わった町だ。現在はブドウ、柑橘、桃、柿等の温帯果樹、雨よけハウス栽培のトマト、胡瓜、ピーマン等サンパウロ市への供給地となっている。

その一角に当移住地はあり、SP250号線の162Km地点に朱色の鳥居の立つ入り口があり、そこから5.5km入ると村の中央区に着く。1961年にJICA直轄移住地に南伯農業組合と福井県の後押しで福井県から3家族入植し、942haの移住地が始まった。そんな事もあり「福井村」とも呼ばれている。現在文協会員(村会)52家族、中央区には文協の会館、体育館、日本語モデル校、市立小学校、州立中、高校、南伯農業組合、日本語の7万冊の蔵書を備えた私立図書館がある。夜はスポーツ、昼は学校と賑やかな場所である。移住地は小さいながらも村としての纏まりはよく、日本語の学習環境は最高で、全伯お話しコンテスト等で多数の入賞者を出している。また日本語能力試験でも1級合格者を多数出している。10年前から始まった和太鼓も盛んで、ジュニアの部で全伯2度目の優勝達成した際の2014年の日本大会で5位の成績を残した。

その太鼓の音にはコロニア・ピニャールで培われた協調性と努力を惜しまない心が表れています。昨今移住地の高齢化に伴い、観光農業の可能性を考える人も増えてきたが、この日本を思い出せる風土を生かし、移住地の発展へつなげていきたいと思っています。

徳久俊行(コロニア・ピニャール文化体育協会会長)



グローバル人材の採用なら

日経HRは、日本経済新聞グループの人材情報企業として、新卒向け就職事業、社会人向け転職事業、キャリア教育事業をメインに展開しています。

日経HR独自の情報に加え、日本経済新聞社や日経BP社のコンテンツをベースに就職活動、学び、スキルアップ、キャリアデザイン、転職などのHR (Human Resources) 情報をインターネットや出版、イベントなどのクロスメディア展開により発信していきます。

日経キャリアNET

社会人のための転職サイト。日本経済新聞や日経・電子版、日経BP社の各種専門媒体を入り口としたビジネスに意欲の高い求職者と、人材を企業戦略の中核と意識する優良企業を結びつけます。



日経キャリアNET
http://career.nikkei.co.jp

キャリアコンサルティング(人材紹介)

エグゼクティブ、金融、IT系人材を中心に、人と企業をピンポイントで結ぶ人材紹介事業を展開しています。日経キャリアNETや日経グループ各媒体との連動やアライアンス・エージェントとの連携など、さまざまなご提案も行っています。

日経HR
Executive

プロフェッショナル、エグゼクティブ
のための転職支援サービス

20代、30代のための
転職支援サービス

日経HR
AGENT
NIKKEI HUMAN RESOURCES

日経アジアリクルーティングフォーラム

アジア9カ国のTOP大生を日本へ招待し、面接できるイベントを毎年8月に開催しています。2014年は北京大学、シンガポール国立大学、チュロンコン大学、インドネシア大学等、103名が来日し30名が内定獲得しました。

NIKKEI ASIAN
RECRUITING
FORUM in 東京



日経メディアで複合プロモーション

日経新聞・日経電子版、日経BP専門媒体(雑誌・Web・メルマガ・フォーラム)を活用した日経メディアの複合プロモーションで人材採用活動をお手伝いします。



仕事の先の幸せを創造する会社

日経HR
NIKKEI HUMAN RESOURCES

お問い合わせ 株式会社日経HR TEL:03-6812-7307
e-mail: webeigyo@nikkeihr.co.jp https://www.nikkeihr.co.jp



BRASIL NOW

ブラジル・ナウ

ブラジル地方選挙： 政治不信と腐敗をめぐる攻防戦

日本ではあまり注目が集まっていないが、ブラジルでは今年10月に各市町村の首長と議員を決める地方選挙が実施される。ブラジルの地方選挙は、大統領・州知事・国会議員・州議会議員を決める総選挙と2年おきに実施されるため、選挙結果は国政の政権運営に対する中間評価として位置づけられてきた。特に今年の地方選挙は、テメル暫定政権下で問題が山積したリオ五輪開催とルセフ大統領の弾劾判決後の実施が予想されることから国政との関連性が高い。この国政との関連性という点からすれば、今回の地方選挙戦を見通す手がかりもまた、ブラジル社会で顕在化する政治不信と腐敗をめぐるものとなる。

まず、与野党間における政党政治の舞台となるサンパウロ市と、オリンピック・パラリンピックが開催されたリオデジャネイロ市での市長選挙戦は、混迷する現在のブラジル政治を象徴する現象がみられる。ブラジル二大都市の市長選挙戦は、現代ブラジルの政党政治を牽引してきたPMDB(ブラジル民主運動党)、PT(ブラジル労働者党)、PSDB(ブラジル社会民主党)など有力政党が推薦する候補者が、有権者から十分な支持を得られていない。ブラジルの選挙戦は、テレビやラジオでの選挙運動の解禁とともに情勢が変わりやすいため、今後の動向には注視が必要である。だが、国政レベルにおけるPT・PMDB間の連立解消後の選挙であることや、有力な政党・政治家への不信が高まる中で、各政党基盤の根幹を担う地方政治レベルでも政党間の勢力図が塗り替えられる可能性は高い。

この有力候補なき選挙戦で注目されるのが、PRB(ブラジル共和党)とPSOL(社会主義自由党)など小規模政党の候補者たちである。PRBは、ネオ・ペンテコステ派としてブラジルで一大勢力をもつユニバーサル神の国教会との関係が噂される保守政党である。PRBへの支持が高まる背景には、グローバル経済の危機、社会の分断、テロ・犯罪の増加による治安の悪化などが伝えられる中で、宗教的倫理観が都市住民の不安を解消する役割を担っているとの見方もできる。一方のPSOLは、ルーラ政権期における国会議員の集団汚職事件(メンサラン)が浮上する中でPTから離党した議員らが結成したリベラル政党である。PSOLは党員の過激な発言で大衆の関心を惹きつけながら、政治システムの公正を訴える。この姿勢が、社会主義的な政治志向を持ちながら政財界に蔓延する汚職に不満をもつ若者や低所得者層の受け皿と

なっている。

苦戦が予想されるPTも、地方選挙を前に手をこまねいているわけではない。PTは党の広告塔であるルーラ元大統領を選挙戦の序盤から投入し、PT推薦候補者の応援遊説を通じて大衆の支持をえる戦略をとる。特に条件付現金給付など低所得者層向けの社会政策を重点的に実施してきた北東部はPTの支持基盤とされる。ルーラ自身の汚職容疑に対する捜査の目も一段と厳しくなるが、ブラジルが直面する政治経済の危機を解決するため、2年後の2018年大統領選挙にルーラの出馬を望む声も根強い。つまり北東部におけるPT推薦候補者の勝敗結果は、ルーラ待望論の是非を問うひとつの指標となる。

さらに今年の地方選挙は、昨年9月に政党の選挙活動に対する企業献金の禁止などを定めた選挙資金規正関連法が導入されてから最初の選挙となる。前回2012年の地方選挙では、弾劾により失職した者、弾劾を避けるために辞職した者、有罪判決を受けた者などのあらゆる選挙への立候補を8年間禁止するグリーン・レコード(Ficha Limpa)法が導入された。選挙資金規正関連法は、それに続く選挙制度の改正である。企業献金は、企業が自己利益をまもるため、政治過程に参加する手段ともいえるが、一部の大企業と政治家との間での癒着の温床ともなる。そこで企業資金の禁止には効果として、ブラジルの政党にも資金調達のためにインターネットを通じて賛同する市民から政治資金を募る政治版クラウドファンディングの活用が期待されている。市民の個人献金は企業献金に比べて資金の透明性が確保しやすく、市民の政治参加の促進にも効果が見込めるためだ。

ただし企業献金の禁止には、アメリカ共和党のドナルド・トランプ氏のように大企業の巨額の政治資金に頼らずとも、個人の財で選挙戦を展開できる政治家の優位を促しうる。また資金難による出馬意欲の低下や、地方ボスと有権者の間に生じる恩顧主義を助長させるとの懸念もある。

とはいえブラジルの選挙制度の改革には、司法、検察、市民が歴史的・構造的な政治腐敗の体質を改善するために、急速に法規制を進める新興民主主義国家としての一側面を捉えることができる。果たして今回の地方選挙は、ブラジル社会の政治不信を緩和する契機となるのか。

舛方周一郎(神田外語大学 専任講師)

ブラジル近代建築を代表する4人の名匠

ブラジル近代建築とは

ブラジルの近代建築が世界で広く認知されるようになったのは、1956年から1960年にかけて行われたブラジリア建設のおかげであった。海岸線から遠く離れた内陸部に首都を移すという冒険的決断は世界を魅了し、新首都ブラジリアの竣工は国際的に報道されたのであった。建築家オスカー・ニーマイヤー（1907-2012）が設計した国会議事堂、大聖堂、大統領府などの美観とオリジナリティは世界的に有名になった。

しかしながら、ブラジル近代建築は通常考えられている以上に多様にして多面的なのだ。ニーマイヤーを筆頭に、1930年代から国際的に認知される業績を残してきた建築家として、ルシオ・コスタ、アフォンソ・レイディ、MMM ロベルト（マルセロ、ミルトン、マウリシオのロベルト三兄弟）、ヴィラノヴァ・アルティガス、リナ・ボ・バルディ、レレー（ジョアン・フィゲイラス・リマ）、パウロ・メンデス・ダ

ローシャらがいる。こうした俊才たちの広汎にわたる活躍のおかげで、ブラジル文化史において建築が顕著な地位を占めるようになったのである。つまるところ、4人の巨匠たちの豊饒にして多面的な独創性が20世紀の建築全般へ貢献しているのだが、本稿ではこのファクトを簡単に紹介してみたい。

ルシオ・コスタ (1902～1998)

青年時代は、ネオコロニアル様式という、リオの伝統的建築学派を継承していたが、1929年、ブラジル訪問中だった、偉大なるフランスの建築家ル・コルビュジエの講演を聞いて開眼し、ブラジル版モダニズム建築を開拓していく。彼の寛容なる知的関心のおかげで、当時最先端の建築コンセプトを吸収しただけでなく、ブラジル植民地期のコロニアル建築様式の再評価を行い、これが歴史遺産保護に繋がっていく。大学教師であり、かつ、才気あふれる若者たちを協働させて、1936年から42年にかけて、文部厚生省（当時）本館プロジェクトを推進したが、この建築は国際的なインパクトを与えたのであった。一般大衆向け家屋から大邸宅、高層アパート、オフィスビル、ホテルまで設計したが、彼の最大のレガシーは、20世紀の世界で最も野心的なモダニズム都市となった、ブラジリアの都市計画（1957年）であった。



ブラジリア建築群（ルシオ・コスタ）



アンドレ・コヘーア・デ・ラーゴ
（駐日ブラジル大使、
日本ブラジル中央協会名誉会長）

ガラスの家（リナ・ボ・バルディ）



リナ・ボ・バルディ (1914～1992)

イタリア出身のリナは、大学卒業後有名な建築グループで働いたが、第二次大戦後ブラジルへ移住する。夫がMASP（サンパウロ美術館）の創設コレクションの責任者として招聘されたからだが、彼女は、ほどなくブラジルでも才能を開花させることになる。初期の代表作品として知られる1951年制作の「ガラスの家」は彼女のモダニズムの先進性を具現化したものだ。1960年代には、あのコンクリート構造が建築当時から現代に至るもインパクトを与え続けているMASP（サンパウロ美術館）を設計・建設するに至った。しかしながら、彼女が選んだ道は驚くべきもので、ブラジルの様々な伝統や文化の多様な側面をも吸収していったのだ。サンパウロの知識人たち、とりわけ演劇関係者との交友も手伝って、ポップ・アートの様々な側面についての研究を進め、ブラジルのフォーマルな建築界では未開拓であった分野にまで進出することになり、その結果、彼女の建築に限定されないアーティストとしての道を歩むことになった。多

MuBE（ブラジル彫刻館）（パウロ・メンデス）

様な“アート知”を吸収し、伝統的な建築手法や建築素材を使うことで、よりオリジナルな作品を創り出し、その結果、国外からも高い評価を受けることになった。

レレー（ジョアン・フィゲイラス・リマ）(1932～2014)

かつてルシオ・コスタは「ニーマイヤー、レレー、そしてコスタ（本人）は、それぞれ、創造、建設、伝統を代表している」と述べたが、この三人の中では一番知られていないレレーは、建築の型・外形よりも建築技法で建築界に貢献した。レレーは1950年代末、大学の建築学部を卒業したばかりで、リオから建設工事のブラジリアへ移る。ブラジリアという新首都の建設を可及的に早く進めるための具体的な解決案を見つけ出す、という挑戦的課題はこの若者を魅了し、彼は夢中になってこの仕事に取り組んだのだ。結果として、この貴重な経験のおかげで様々な技法や技術をレベルアップすることになった。彼の建築家としての仕事は、病院、学校、都市インフラといった公共建築が主体であった。「サラ病院グループ」向けに行ったいくつものプロジェクトは、鋼鉄やコンクリートといった建築資材の面でも、入院患者が自由に構内を移動できる構造の面でも、自然空調においても、革命的であった。なかでも、アトス・ブルカウン

のようなアーティストたちに自由存分に才能を発揮させ、陰気な色調が普通の病院の壁やスペースを入院患者の心を明るくする色調に変えたのは、実に革新的であった。常に社会問題に関心を有していたので、鉄筋コンクリートのプレハブ工場を創って、公共工事のコスト削減を実現したが、さらには、より軽くなるように開発されたプレハブ建材の生産ラインを作り、その結果、低所得層向け需要に対応できるようになった。いわば、経済的な“ハイテク”を開発したといえるが、その建築技法の質的レベルは最高品質を伴っていたのだ。

パウロ・メンデス・ダ・ローシャ（1928～）

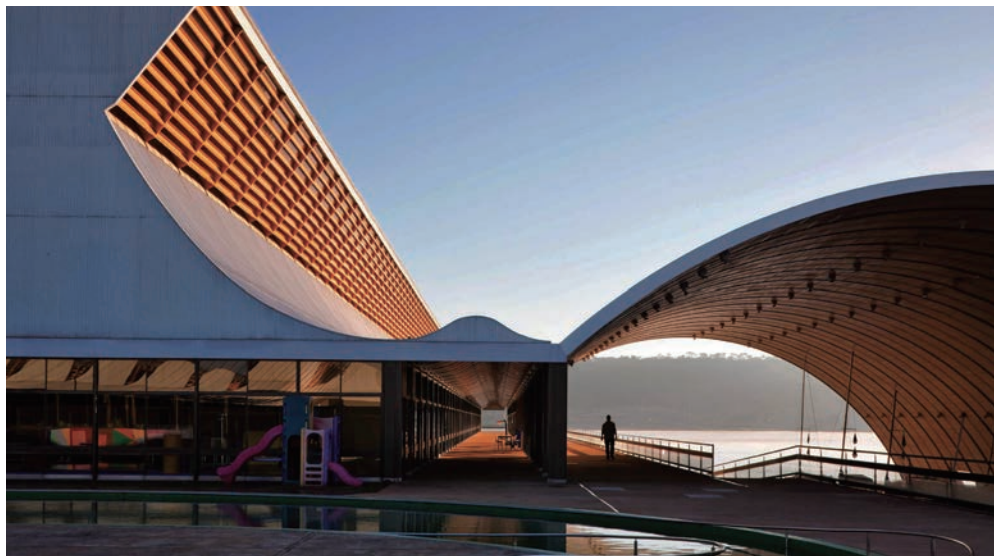
建築界のノーベル賞に相応するプリツカー賞を受賞したブラジル人は二人しかいない。1988年受賞のニーマイヤーと2006年受賞のパウロ・メンデスだ。パウロの建築家としての実績は主としてブラジル国内に限定されていたが、1980年代以降国際的に認知されるようになり、様々な賞を受賞している。なかでも2016年、ヴェネチア・ビエンナーレで金熊賞を受賞したことが特筆される。彼の建築は、“サンパウロ学派”に属するといわれるが、同



派の特徴は、鉄筋コンクリートを広く使用することで、リオデジャネイロのモダニズム建築を特徴づける曲線なるべく避け、建築の構造そのものを明示する、という手法だ。パウロ・メンデスの建築は、その厳密性と全体性が印象的であり、これら二つの建築技法原則は、個人宅から博物館、競技場（スタジアム）、大学まで、すべての建築作品に貫徹されている。彼は、1960年代から今日まで、こうしたパウロ風建築流儀を保持しているが故に、“錯乱的”と呼べるほどの一貫性を包摂する作品群を創ってきたのだ。というのも、市井の一般人が建築作品をみて、パウロのものだと気が付いたとしても、いつその作品が創られたかという創作時期を特定することはほとんど不可能であるからだ。

結論的に

これら4名の建築家とオスカー・ニーマイヤーが、ブラジル近代建築のいくつもの道を提示してきた。彼らのなかで存命なのはパウロ・メンデスのみだが、新しい世代の名建築家たちとともに、ブラジル建築を革新し続けている。新しい世代とは、アンジェロ・ブッチ、マルセロ・フェラーズ、マルシオ・コーガン、イサイ・ヴェインフェルディ、アンドラーデ・モレチンといった才人たちが、彼らこそ、ルシオ・コスタの世代によって創造されたモダニズムの伝統を一層充実させ、コンテンポラリー建築の新たな進路を切り開いている。



サラ病院（レレー）



●特集●ブラジルの建築

21世紀にむけて共に生きる事へのメッセージ オスカー・ニーマイヤー建築



長谷川祐子
(東京都現代美術館参事、
東京芸術大学教授)

ニーマイヤーとは

21世紀に最後に生き残った革命家は誰かときかれたとき、人びとはすかさず二人の名前をあげます。一人は、キューバのカストロであり、二人目は建築家のオスカー・ニーマイヤーであると。彼の偉大さはブラジルのモダニズム建築を世界に知らしめたほどのユニークな建築言語をつくりだしたことと、その長きにわたる生涯の間、圧倒的な数の建造物を設計したことにあります。

1907年ブラジルのリオに生まれたオスカー・ニーマイヤーは、2012年104歳で亡くなるまで建築家としての活動を続け、ブラジルのモダニズム建築の父と呼ばれました。手がけた建造物は、住宅から国会議事堂、道路やトンネルも含め大小さまざまな規模にわたり、生涯に2000の建築を手がけたといわれています。その基本コンセプトはいつも、人間、パブリックに向けられていました。彼が革命家と呼ばれる所以は、人びとが集まる場所をつくるにあたってのデモクラティックな考えにあります。

「曲線は全宇宙を構築する」というニーマイヤーの言葉どおり、彼は曲線を多用しており、リズムカルでのびやかな線は、山の稜線や植物の葉、身体ラインなど

有機的なエネルギーを感じさせ、その生命感や官能性ゆえに多くの人びとを惹き付けました。

建築家の描くドローイングはしばしば興味深いものが多いといえます。彼は幼いころより、絵を描くのが好きで、イメージとして浮かんだことをそのままドローイングにしていたといえます。ドローイングにしたものが具体的な立体となったあがってくる、彼はそのプロセスをそのように語っています。手のしなやかな動きがそのまま線になったような豊かな曲線の魅力はこの頭と手がすなおにむすびついている彼の素質に由来するものといえるでしょう。

愛する人と出会ったとき、その人を養うために建築家になると決めたとニーマイヤーは語っています。彼についてのさまざまなエピソードは、その大胆さ、おらかさ、世界に対する観察や批判精神、官能や感情への理解など、その人間性の豊かさをものがたっています。

ブラジルのモダニズム(近代主義)

ここでニーマイヤーの革新性の背景にあった、当時のブラジルのモダニズムの状況をみてみましょう。それは、1920年代の詩人、オズワルド・デ・アンドラー

デの「食人宣言」にみることができます。この食人宣言は、原住民のトゥビ族の戦いに勝った部族の戦士が相手の優れた戦士の身体部位を選んで食べる、つまり相手の優れた部分を「食らう」という行為を通して自身をパワーアップしていくという慣習から着想したものです。あいつの文化の優れた部分を選びとり、それを構築的に自己のものとしていくという身体性と知性が融合したブラジル独特の近代化の過程といえます。この運動は詩や文学、絵画、建築などから始まりました。建築家ルシオ・コスタやニーマイヤーはこの思想的背景の中で近代建築のありかたを模索していったといえます。

ニーマイヤーは28歳のとき、ルシオコスタの事務所に勤務し、仕事の関係で、モダニズムの巨匠、ル・コルビュジエと出会います。その過程で、彼はモダニズム建築について独自の思考をめぐらすようになります。「私は曲線を故郷の山々や海の波、愛する女性の身体に見いだす」彼の言葉は、自分を育んだ、環境と人びとへの愛が、自分にとっての形の原点であることを伝えています。それは直線中心のモダニズム建築に対する批評の実践でもありました。

ニーマイヤー初期作品

彼が早期にユニークなヴィジョンとスタイルを完成していたことは、30代のときの作品に表れています。パンブリャのコンプレックスがそのはじまりでした。ここでニーマイヤーはヨーロッパモダニズム建築のスタイルと自由な曲線のデザインの組み合わせを見事に展開しました。それはコンクリートと鉄骨という素材をつかい、どこまで斬新な形が可能になるかという構造設計上の実験でもあったのです。またそれは湖を中心とし

た景観と一体となった建築であり、この一体感は彼の特徴といえます。サンフランシスコ・デ・アシス教会は屋根と壁が一体となってかまぼこ型の屋根が波のようにうねった形をしています。これは可展開局面といってそれぞれがシングルカーヴでできており平面をまげて作った局面です。コンピュータや3D技術のなかった時代にその制限を感じさせない自由な3次元的なものをつくったのは驚くべきことといえます。教会の中にはいっていくと拝廊と身廊にかかるヴォールト（アーチを平行におしだした形の天井構造）が奥に行くに従って高さや幅が減少していき、祭壇へと視線が向くように考えられています。側面には窓などの開口部はなく、内陣とヴォールト天井の接続部分に設けられたわずかな開口部（窓）から自然光がしずかに神秘的にはいつてくるようになっています。建築内部での人びとの体験を重視する彼の考えはブラジルにおける大聖堂にも表れています。16本の柱が花束のように束ねられ王冠のような形をした大聖堂は360展開する華やかなステンドグラスからの光につつまれます。これは建物そのものに入り口がついておらず、少し離れた場所から地下道をとって、祝祭的な光の場所にぬけるようになっています。

ニーマイヤーはアーティストと共同制作をよくおこなったことでも知られています。建築空間はアートにさざげられるためのものだ、とも語っていました。カンディド・ボルチナリーによるもので、ピカソ的にデフォルメされた、しかし優しい面立ちの人物たちが、流れるようなリズムで組み合わせて配置され、建築の意匠と美しくレゾナンスしています。日系の著名な作家、トミエ・オオタケとも彼女の大胆で抽象的なフォルムとよく響き合った共同制作を行いました。

1950年代のニーマイヤー

リオに1953年に建てられたカノア

スの邸宅は、ブラジルの自然に対するニーマイヤーの思考をよく表しています。これはリオのサンコンラード地区の山の麓に斜面に埋めこまれるように建っており、うっそうと生い茂った木、その木々の間から南に向けて海が見える眺望が開けています。ブラジルの旺盛な生命力とほの暗さの中にある神秘的な力を愛したニーマイヤーの感覚が環境と溶け合っ

ブラジリア建設

ニーマイヤーの最大のプロジェクトといえば、ブラジルの首都、ブラジリアの建設があります。1956年クビチェック大統領から新首都の設計を依頼され、チームを組み、ブラジリアに移動、わずか3年間で、1960年、これを完成させるという偉業をなしとげました。

彼の師でもあるルシオ・コスタがマスタープランをてがけ、ニーマイヤーが大統領官邸、迎賓館、国会議事堂、最高裁、大聖堂など大半の建物の設計を手がけました。その過程は壮絶な苦勞があったようです。未来都市としての新首都の場所は緯度、経度的にブラジルのほぼ中央として設定されたため、それは森林の真ん中であり、道路も鉄道もなく、空輸からはじめていくという状態でした。

ニーマイヤーはテント生活から始め、図面もその場で考えながらハンドドローイングでひいていくという様子だったようです。ここではもともと何もなかった広大な土地に、弓と矢に例えられるような明解な構成ードローイングが描かれています。それはとても純粋な形でつくられており、くの字を描く帯状の《弓》のエリアに対して、《矢》のようにまっすぐなブロムナードが直交しています。私は生前のニーマイヤーに建築家のSANAA事務所の二人とリオのスタジオにインタビューにいったことがあ

ります。そのとき、ブラジリアには決して満足していないと、語っていたのが印象的でした。「あれは時間のなさすぎたプロジェクトだった」そう若者のように語っていたニーマイヤーの率直さが記憶に残っています。

昨年のニーマイヤー展

現代美術館での展覧会のハイライトは、イビラプエラ公園（1954年開園）の再現でした。広さ180ヘクタールで多様な樹木が植えられた市民公園を敷地として展覧会や文化イベントを実施するためつくられたまさに人びとのための場所、サンパウロのハートともいえる場所になっています。5つの建物の間をつないでマティスの切り絵のフォルムを思わせるダイナミックな遊歩道は細い円柱によってささえられ、豊かな空間をかんじさせます。その下を人びとは散歩したりローラースケートを楽しんだり、小さなキオスクができていたり、自在につかひこなしています。人と自然がユートピア的な光景をつくりだし、そこが文化の場であること、知的生産がおこなわれる場所という意味で、21世紀に生きる私たちにとって示唆的なプロジェクトといえます。

500平米の展覧会場にはグーグルマップをプリントしたカーベットを敷き、そのうえに公園全体を白い模型で再現しました。500人の人びとも小さな模型でつくったのです。観客はそこへころがったり、すわったりしてこの空間を楽しんでいました。

最後に

今世界は多様な異なった文化や慣習、思想によって構成されており、相互の移動の活発化によって、さまざまな出会いや衝突が起こっています。私たちが生きる21世紀の現在にあって人びとが集まる場所、それぞれが自由でありながら、周囲の町や自然との対話、一体感の中でいかに共存できるのか。ニーマイヤーの「人間性」への態度はおおきな問いかけと示唆となって私たちの心に響いてきます。



国会議事堂（ブラジリア）



ラテンアメリカ記念館（サンパウロ）



東京都現代美術館「ニーマイヤー展」展示のイビラプエラ公園模型



環境都市クリチバの挑戦



池田敏雄
(在クリチバ日本国総領事)

クリチバ総領事館について

在クリチバ総領事館はブラジル南部三州（パラナ州、サンタカタリーナ州、リオグランデスル州）を管轄しています。当館はパラナ州の州都クリチバに設置されています。

パラナ州の面積は199,314平方kmで日本の約半分の面積であり州面積の半分が海拔600m以上の高原です。人口は11,163,018人(2015年)でブラジル全体の人口の約5%に当たります。パラナ州には世界的観光地であるイグアスの滝があります。ブラジルを訪問した方であればクリチバを訪問したことはなくともイグアスの滝を訪問した方は多いのではないかと思います。

パラナ州はブラジル国内でも有数の生産量を誇る農牧畜業、活発なアグロビジネスで知られていますが同時にブラジル国内で第三位の自動車生産州でもあります。

またパラナ州にはサンパロに次ぐ規模の日系社会(約15万人)が存在しています。日系人は政治、経済、医学、司法などブラジル社会の幅広い分野で活躍すると共に日本語・日本文化の保存・普及に努めています。パラナ州は移住者・日系人による地域開発への貢献に加えて日本の地方と連携（パラナ州は兵庫県、クリチバ市は姫路市、マリंगा市は加古川市、ロンドリーナ市は西宮市及び名護市、パラナグァ市は淡路市と姉妹提携）していることもあり大変親日的な州であり、貿易・投資を通じて日本との関係が深い州となっています。

私は在クリチバ日本国総領事として

クリチバで勤務しています。平均標高934mのクリチバの冬は寒さが厳しく、トロピカルなイメージが強いブラジルの中ではやや異色です。私自身クリチバを旅行者として訪問したことはありましたが勤務することは初めてでした。着任後クリチバの街中を少しずつ知るにつれ、クリチバには緑と公園が多く、また、創意工夫を凝らした都市計画・交通システムが施されていることに改めて感銘するようになりました。

緑化都市クリチバ

クリチバの全市域の18%を緑地が占め、街路樹を除いた一人当たりの緑地は49平方m、街路樹を含めると51.5平方mで世界の都市の中でもノルウェーのオスロに次ぐ水準で世界屈指の緑地を有しています。しかし70年代には一人当たりの緑地は1平方mに過ぎずクリチバの緑地はそれ以降の戦略的な都市計画の下で確保され保全された成果とされています。

クリチバ市内にはイグアス川の支流であるベレン川やバリグイ川などが市内を流れているため河川の氾濫による洪水に見舞われていました。またこの

ような低湿地はスラム化していました。その一方で市民のための公園は不足していました。クリチバ市は72年から主要河川の流域地帯に沿って公園を整備し洪水対策となる貯水池を設置すると共に生態系を保存し市民の憩いの場を提供することを目的とした公園整備計画に着手しました。

この結果クリチバ市の代表的な公園の一つでありクリチバ市民が憩うバリグイ公園の周辺はかつてスラムであったのが現在では高級住宅地となっています。

またクリチバを代表する観光地として91年に建設された植物園もかつて周辺の住民がごみを捨てる場所でした。現在は幾何学的な形状を有する庭園、温室があり、また、沖縄桜も植えられ6月の開花時にはクリチバ市民や観光客の目を楽しませています。

クリチバの都市計画

クリチバ市の都市計画、交通計画は世界の都市計画担当者にとって模範になっていると聞きます。クリチバ市の都市計画、交通計画を着想しクリチバ市長として実現したのがジャイメ・レルネル氏です。レルネル氏は64年ク

リチバ市のマスタープランコンペで最優秀賞を獲得します。レルネル氏はクリチバ市の都心から伸びる4本の回廊に沿って都市を拡張するとのアイデアを提言しました。そして公共交通システム、道路システム、土地利用、歴史保全の統合を図るべきであり、都市計画の基になる情報を収集するための調査・研究機関の創設を提言しました。クリチバ市は同提言を踏まえ66年にクリチバ都市計画研究所(IPPUC)を設立しました。IPPUCはクリチバの都市計画調査・立案の機能を果たし現在も存続しています。

71年に弱冠33歳でレルネル氏はクリチバ市長に就任しました。

同市長の名前を高めたのはクリチバ市街中心部の大通り(11月15日通り)の3区画に亘る車道を連休の3日間を利用して72時間で歩行者専用道路に変えてしまったことです。現在この通りは花通りと呼ばれ人々の交流のためのスペースになっています。初めは反対していた沿道の商店主も歩行者専用道路に人々が集まるようになったのを見てレルネル市長の政策を受け入れることになり他の区画の商店主も歩行者専用道路化をレルネル市長に嘆願したため歩行者専用道路区間はさらに延長されました。都市計画の専門家であるレルネル氏の理念は人を尊重する都市作りです。他の都市が乗用車を優先した都市作りを展開している時にレルネル氏は人を優先した都市作りを行いました。

クリチバの公共交通システム

クリチバはバス高速輸送システム(BRT: Bus Rapid Transit)の発祥の地です。レルネル・クリチバ市長は74年世界初のBRTの運行を開始します。BRTは連節バス、バス専用道、バスレーン等を組み合わせることで、

速達性・定時性の確保、並びに、輸送能力の増大が可能となる高次の機能を備えたバスシステムです。

レルネル・クリチバ市長は地下鉄の代替案としてBRTを発想しました。当時人口が急増していたクリチバの公共交通の要として地下鉄の導入が検討されていましたがクリチバ市には地下鉄を建設する資金、技術が不足していました。レルネル市長は地下鉄が提供する利点は信頼性、速度、快適性、頻度であると定義し、地下鉄システムの代わりにバスシステムによってこれらの要素を満たすことが出来ないか検討しました。その結果バス専用レーンを設置することで信頼性を、バスの出入り口と同じ高さによりバス料金前払い可能なチューブ状の停留所を設置することで速度を、新車両を導入することで快適性を、バス運営会社と運行するバスの本数に応じた支払い契約を結ぶことで頻度を、バスシステムが満たすことが可能となりました。

BRTは地下鉄システムより安価で効率的な公共輸送システムであることからブラジル国内及び世界中の都市で採用され、2014年10月時点において世界186都市でBRTが運行されていると言われています。

クリチバのマスタープラン

クリチバ市はレルネル氏が構想したマスタープランによって都市を4つの骨格軸(その後骨格軸が一つ追加されて5つになる)に沿って発展することになりました。そしてその骨格軸に沿って土地利用の高度化を図り公共交通の幹線路線を通すこととしました。このためクリチバのBRTはクリチバの都市計画と統合化され、都市の発展軸に沿って幹線となるバス路線が整備されています。また幹線路線沿いの公共交通の利便性が高い地域は交通需要が集中的に発生する業務エリア、商業

エリアとして活用し、そうでない地域は主に住宅利用に充てられています。

クリチバ都市計画に貢献した日系人

レルネル・クリチバ市長の懐刀として活躍した二人の日系人を紹介します。一人はカシオ・タニグチ氏です。同氏は交通技術者としてバスターミナルの運行管理システムを作成した功績がレルネル市長の目に留まりクリチバの公共交通システムを管理するクリチバ都市公社総裁に登用され、現在のクリチバのバスシステムをレルネル市長と共に策定しました。その後レルネル市長の下でIPPUC総裁を務めた他クリチバ・インダストリアル・シティを作る上で貢献し1997年より二期にわたりクリチバ市長を務めました。

もう一人はヒトシ・ナカムラ氏です。ナカムラ氏は70年にパラナ州に移住した元日本人(ブラジルに帰化した日系ブラジル人一世)です。ナカムラ氏は71年クリチバ市公園課において勤務を開始し公園整備のアイデアを提案したところレルネル市長の目に留まりバリグイ公園他の公園整備を担うことになり大いに成果を上げました。その後89年にレルネル市長によりクリチバ市環境局長に抜擢され95年にはレルネル・パラナ州知事によりパラナ州環境局長に抜擢されました。

ナカムラ氏は公園整備の他クリチバ市において自然生態的な動物園や環境市民大学の建設、スラム街でのゴミ収集を促すために市周辺農家から余剰農産物を買上げ分別したゴミと交換する緑との交換プログラムなど様々なアイデアを実行に移しました。

(参考文献: 服部圭郎著『人間都市クリチバ』学芸出版社ほか)



日系社会は3世へ移行しつつあるが 現役日系2世を見直し、 活用すべし

鈴木雅夫
(サンパウロ新聞社 編集局長)



世界最大の日系社会が存在するブラジル。これまで、日系人の総数は約 160 万人と言われてきた。しかし、昨年、駐ブラジル大使の梅田邦夫氏が 190 万人論を唱え、話題となった。それぞれの言い分には根拠があるのだが、その議論は別稿に譲るとして、サンパウロに住んでいると日系人は確かに多いと感じる。町を歩いていて出会わない日はない。地方に出ると日本人や日系人に会うことの方が珍しいことを考えると、ブラジルでもサンパウロは特異な地域と言える。

それもそのはず、日系人総数の約 70% はサンパウロ市内及び周辺都市に居住しているという。彼らは各界で活躍していることは知られているが、最近、改めて日系 2 世の存在が日本人にとっていかに重宝で重要なのかを実感した。

個人的な話で恐縮だが、サンパウロ州へ収めた税金の還付金が戻ってくるはずなのだが 2 年間滞っていて、その理由を聞こうと思い、サンパウロ州税務局の窓口へいくことになった。ポルトガル語が操れないため、通訳を同行して窓口を訪れた。係官は 10 人以上いるのだろうが、それぞれ仕切りがしてありよくわからない。順番を待ち、呼ばれた番号の前に座っていた係官は日系人女性だった。日本からブラジルに来て日が浅いためポルトガル語が分からず、通訳を同伴したことを告げると、「私の両親も同じよ」と笑顔で応えてくれた。

パソコンから資料を引き出し、「ああ、サンパウロ新聞なのね」というと、「父はサンパウロ新聞をずーっと読んでいたの。もうなくなったけどね」と身の上話を始めた。30 分ほど話をしただろうか、仕事の話はわずか 1 分で終わり、両親が苦勞して育ててくれたことを誇りにしていた。

それから 1 週間もしないある日、コンゴニマス空港の連邦警察事務所に飛び込みで入った。オリンピックに出場する日本のある競技団体のサンパウロでの事前合宿のお手伝いをすることになったからだ。色々調べるうちにグアルーリョス空港など国際空港は選手団に対して入管や税関などは簡素化されるなど特別待遇になっているのだが、国内線では特別扱いは一切しないという。一行は開会式翌日にコンゴニマス空港からリオ空港に飛ぶのだが、同空港は出発直前になって搭乗

口が変更になることが多い
ため、搭乗口
まで案内役と
して入ること

を許可してもらおうと考えてのことだった。

受付窓口の女性に理由を話すと、担当官のところに案内された。名刺を差し出すと、流ちょうな日本語で「僕の父はパウリスタ新聞に働いていたんですよ」と父親の名前を告げられたのだが、私が新聞社に関わる以前のことで記憶にはなかった。ここでもお互いの身の上話に花が咲き、その場で搭乗口まで一行を案内する許可証を発給してくれた。

この二人の父親は私がかかわってきた邦字紙に何らかのつながりがあるケースなのだが、考え方によっては 190 万人と言われる大きな日系社会は意外に小さいのではないかということだった。雑談の中で出てくる人はお互いに知己があり、手繰っていくとそのネットワークは広範囲になる。彼らはブラジル日本文化福祉協会（文協）や県人会に入入りしているわけではなく、いわゆる「日系コロニア」とは無関係な生活をしている。だが、日本人や日系人、日系社会に興味がないわけではない。

もう一つ、この 2 人との出会いで日系 2 世に対する既存概念が変わった。我々は、ブラジルの日系社会は 2 世から 3 世へと移行したという考え方が一般的になっている。ところが実際にはブラジル社会の中で中間管理職からトップまでまだまだ 2 世が活躍しているということを肌身で感じる事ができた。こうした立場の 2 世との交流、親交を深めることが今を生きる 1 世及び日本人には不可欠なことだ。2 世の人達は 1 世である両親の背中を見て育っている。言葉に苦勞し、ブラジル社会の中で家庭を守ってきた日本人の生きざまを誰よりも知っている。だからこそ、単語を並べる程度のポルトガル語にも真剣に耳を傾けてくれるのだろう。

数年前から日本外務省、JICA は若い日系人の日本招へい枠を拡大して、日本への理解を深めてもらおうとしている。これは、2 世、3 世を問わず、ブラジル社会で影響力のある人たちに重点が置かれている。末永く継続するべき事業だろう。公的資金だけに頼らず、ブラジルに進出している日本企業も日系人社員の育成に力を注いでほしいと思う。まず、2 世に重点を置いてほしい。理由は、前述のとおり日本人の両親を見て育っているため日本人の思考方法が理解しやすいからだ。しかも、40 代、50 代の 2 世の両親は戦後教育を日本で受けており、日本に住む日本人と思考回路が近いため親近感を抱きやすいという利点もある。世代による日系人の特性を良く考えてほしいと願っている。



新潟県人会式典時。1 世は高齢化したが、2 世はまだまだ働き盛りがたくさんいる

ロート製薬 ブラジルへの進出活動について

上島英郎
(ロート・ド・ブラジル/
マイラ・コスメティコス
ディレクター)



ブラジルに初めて来たのは 2009 年の夏で、最初に驚いたのはアポイント取得の難しさだった。出発前に各方面にメールで依頼したが、日系企業の方々とは約束できたが、非日系の団体や企業とはできなかった。しかし、ABIMIP という一般薬協会だけは受けて貰え、事務局の G 氏と面談できた。一つできると、そこから芋づる式に多くの企業や人々と面談でき、アミーゴ社会とはこの事かと認識した。当初のミッションは新ビジネスを探せという事だった為、商工会議所事務局長の平田様にお願ひし、様々な業界の方々を紹介して頂いた。雑誌やレストラン、酒造メーカー、服飾デザイナー、事業家等多岐に渡った。面白い事例では、有名な和食レストランの買収案件があった。間に立つ料理学校の先生と一緒にオーナーに会いに行ったが、本業とのシナジー効果を実験するには、レストランが本格的過ぎた為に買収価格が高過ぎて断ってしまった。またアマゾンの植物研究所で医療効果等のある多くの植物抽出エキスにも出合ったが、本社の研究所が当時興味を持っていた事柄に合うものが無く、ただ私の知識になっただけに終わっている。しかし、これらの経験はブラジルを色んな側面から知る事ができ、非常に有難かった。当時お世話になった方々には大いに感謝している。

ブラジルへの進出方法については、我々メーカーの場合、大きく分けると ①商品輸入会社を作って、輸入又は生産委託から始める。②現地の企業と合併する。③現地企業を買収する。の 3 つが考えられたが、医薬品や化粧品のような規制業種では、①の輸入会社であっても、許認可を取得するのに年単位の時間が掛る点、また生産委託では製造のライセンスやノウハウが受託会社に渡ってしまう危険性があった為、②③の合併や買収によって、必要な許認可及び工場を含む施設や人材と、彼らの持つ業務上のノウハウ等を一挙に取得するのが得策と思われた。それで、後に我々のコンサルタントとなった前述の G 氏に頼んで、一般薬や化粧品を製造する手頃な規模の企業を探して貰った。その中では会社の状況によって、合併希望先と買収希望先が分かれたが、合併は後に相手と意見の相違が考えられた為、買収案件に絞った。医薬品や化粧品会社を売りに出す時の典型的な状況として、当局の製造環境への規制が厳しくなり、それに対応すべく施設を改善したが、改善後に資金が回らなくなってしまったというのがある。当局が先進国に追い付く為、規制基準を段階的に上げている事が原因にあり、元々金利の高い国である為、目算が狂うと返済出来なくなるのである。また、08 年のリーマンショックが各オー

ナーの資産状況に少なからず影響していた。従って、売りに出た会社は大抵、借金だらけであった。借金は税金滞納が中心だが、概ね借金が年間売上の半分を超えると、自力での復活が難しくなると聞いていた。もう一つの典型事例は、後継者不足で会社を手放す場合だった。これには、良い会社があったが、税込売上の 4 倍 5 倍の買収額を要求し、独特の要求理論を展開、なかなか折り合えなかった。

ブラジルは企業誘致に熱心な州や市があり、独自の誘致策を準備している所がある。G 氏の友人に SC 州の議員がおり、SC 州が医薬品会社を誘致していたので、州知事と面談する機会があった。面談時に TV 撮影が入ったので緊張したが、同席した知事秘書に将来の従業員数を質問された時、まだ具体的計画は無いが、先に進出した国々では 10 年後に 1000 人程度になった所もあると話したら、急に秘書たちが色めきたって、我々を横において相談を始めた。何年間かは州税を免除するという策だったが、同州の T 市では、工場建設の土地を無償貸与する、工場に繋ぐ道路・水道・電気等も市で整備する、10 年間は市税を免除するという内容だった。結局、SC 州での買収商談は成立しなかった為、これらの条件は得られなかったが、今後進出をお考えなら、候補地の州や市当局と相談されれば良いと思う。

ブラジルは、今は経済が不調で、元々貧富の差が激しく、富の再配分システムが脆弱な為、社会的な問題も多く抱えているが、民主主義国であり、資源や水が豊富で、まだまだ人口を抱える余力があり、発展の要素が有り余る国である。日本びいきの国であることも付け加えたい。世界市場への進出をお考えの際には、候補にされることを強くお勧めする。



ブラジルの選挙制度が示唆するもの



松田純一
(弁護士。松田総合
法律事務所所長)

連載

ビジネス
法務の肝

ルセフ大統領の停職を受け、5月12日に発足したメル大統領代行率いる暫定政権は、複数の閣僚が汚職疑惑のため組閣後まもなく辞職した。更に、大統領代行に対する汚職疑惑や弾劾請求もあり、政局は混迷が続いている。また、英国の欧州連合(EU)離脱決定は世界の金融市場に衝撃を与え、我々はブラジルのみならず世界全体が極めて不確実、不安定であると認識せざるをえなかった。

ところで、ブラジルの大統領選挙は一次投票で候補者を二人に絞り、決選投票で過半数を得た候補者が当選する仕組みだが、ルセフ大統領は2014年10月26日実施の決戦投票で、得票率51.64%という僅差でネベス候補に勝利した。両者共、文字通り一票の重みを実感した筈だが、ブラジルの選挙制度は『義務投票制』である。今回は選挙制度の特徴を見ながら、ビジネスのことも考えてみたい。

投票の義務化

国政レベルの議会議員選挙にて義務投票制が採用され、罰則適用がある国は世界で20数か国あるが、ブラジルでは大統領選挙も義務とされている。投票の義務化は1932年に遡る。18～70歳の国民に義務があり、識字能力のない者、71歳以上と16、17歳の投票は自由。正当な理由なく棄権した場合、罰金(最大35レア)が適用される。罰則の適用は厳格とはいえないが、罰金の支払いが三回続くと有権者番号が剥奪され、身分証明者やパスポートの発行が困難になる。

2014年のブラジル大統領選の投票率は81%であった。一方、日本で本年7月に行われた第24回参院選投票率は54.70%、前回2013参院選の52.61%を上回ったものの、戦後4番目の低水準に留まった。地方選挙の場合、更に低い投票率も珍しくないことはご承知のとおりである。投票の義務化は有権者の政治参加を促す効果があるものの、政治に無関心な人達にも投票させるため、票の売買を助長するといったマイナス面もある。ブラジルでは、投票日が近くなると選挙違反を防ぐ目的で銀行のATMを利用禁止とする地域もあるという。また、ある調査によると、投票後1ヶ月後には有権者の20%が誰に投票したか覚えていないとの報告もあった。

大統領選では、海外在住のブラジル国民も投票する

義務があり、日本国内でも投票所が設けられる。一方、わが国外務省の統計によると2015年10月1日現在、海外在留日本人は131.7万人(その内、在ブラジルは54,000人)。日本の首相選出は直接選挙でないが、海外在留が理由で地方自治の選挙権を喪失する状況は再考の余地があると思う。

最先端の投票システム

ブラジルの投票所では「電子投票システム」が1996年に試験的に運用され、2000年から本格的に利用されている。候補者の氏名と顔写真が出てくる端末にタッチパネルで投票する方法で、顔写真は読み書きの出来ない人も投票できるとの配慮であるが、昨今、一部では不正を防ぐために本人確認の指紋認証まで導入されていると聞く。不正、人為ミスや労力の軽減だけでなく迅速な開票作業を可能とし、大統領選といった広大な国土にまたがる選挙でも数時間の内に当確が判明する、正に世界最先端の投票システムと言える。投票の電子化には社会文化の下地もあると指摘したい。ブラジルはIT普及の先進国であり、世界で最もユーザー数の多いSNSであるフェイスブックを例にとると、ブラジルは、米国、インドに続き世界第三位のユーザー数(84百万人、2015年1月現在)人口普及率42%を誇る(日本はユーザー数22百万人(20位前後)、人口普及率17.44%)。

ブラジル産業政策へのヒント

ブラジル経済の今後を考えると、現在の主流である資源や農畜産物といったコモディティーに依存する「モノ」モデルに「ソリューション・イノベーション」モデルを付け加えることが必要であろう。グローバル化の進展により製品特性や価格だけで競争優位を長く保てる時代ではなくなった。中型旅客機やエネルギー関連技術で世界をリードするブラジルは、ニーズの変化や多様化に対して最適なサービスを提供する能力がある。「電子投票システム」はその好例と思う。「農業の工業化」もIoTで壮大な実験が実行できるだろう。

日本をはじめとする友好国との協調により、先進的なビジネスを展開する機会をいち早く掴んで欲しいと願うものである。

無申告・過少申告の海外保有財産に係る新ルール



加藤雅規
(PwC税理士法人
パートナー)



マルコ・クアドロス
(同ディレクター)

新しいグローバル基準での透明性や税務コンプライアンス要求の下、ブラジルの税務当局は、これまでブラジル税務当局に申告されていなかったり、正確に申告されていなかった海外に保有する財産について、納税者に報告する機会を与える新しい規則を発表している。以下において、その規則と特別な要件の概要について案内する。

背景

2016年1月14日、連邦の公的な刊行物において、ブラジル大統領は、法No. 13.254 (Asset Repatriation Law) を承認し、税務の特別制度や外貨規制を設けている。この特別な税務制度や外貨規制は、ブラジルの領域外に保有する申告されていない財産について適用される。

特に、個人及び企業納税者は、2014年12月31日現在(あるいは、それ以前において)、海外に保有する財産で正しく申告されていない財産について、関連する税金とペナルティを支払うことで、本国への送還または合法化が認められる。

ブラジルの領域外にある、次の財産については、申告対象となる。

- 銀行預金口座の現金、不動産で、申告されていなかったり、正しく申告されていないもの
- 法により許容される、あるいは、法により禁じられていない、活動に関連したリソースを基に取得した財産と権利
- 送金されたり、海外で保有されたりしている、通貨、資本、財産及び権利で、申告されていなかったり、正しく申告されていないもの
- ソフトウェア、著作権、トレードマーク、特許、ノウハウ等の無形資産

この財産に係る規則に従うことに同意する納税者は、連邦税務当局(RFB)にブラジル中央銀行(BACEN)にコピーを添付し、関連財産をリストアップし、ブラジルレアルでの価値を表記して、申告書を提出することになる。申告の提出期限は、税務当局が発行する規範(Normative Ruling)から210日間である。

この場合に、法No. 13.254が与える特典には、以下のものが含まれる。

- 税務犯罪、マネーロンダリング、税社会負担金逃れ、承認されない外貨の出入りに関連したペナルティなど、一定の犯罪ペナルティに対する恩赦
- 支払遅延による罰金、職権上または独立した罰金の

100%割引

- 納税義務を順守しないことから生じる税ペナルティの免除
- 法律上求められる期限までの申告を行わなかったことに対する罰金の免除、及び
- 証券取引委員会(CVM)やその他の規制主体が課す罰金の免除

一方で、それでもなお、申告財産については、15%の所得税が課され、さらに、2014年12月31日の為替レート(R\$2.65/US\$)で評価替えした財産の価値に基づいた100%のペナルティが課された結果として、約30%の負担率となる。現行の実効税率は、2015年12月31日の為替レートを考慮すると、約20%となる。

これまで申告をせず、または、正しく申告をしてこなかった財産につき、今回の規則に従わない納税者が、もしブラジル税務当局より将来更正を受ける場合、仮装隠蔽、無申告などの場合に適用される、より高い税率が課されることになる。なお、ブラジル税務当局は、多くの諸外国と情報交換協定を締結しており、将来、情報へのアクセスが可能となることも含め、この新しい規則を注視する必要があると考える。上述した約30%の税負担率は、原則として、無申告、過少申告の納税者に対してより小さな負担となると考えられる。

海外投資は続けられるものの、今回の特別制度は海外に保有する財産の申告を要求するものである。

最後に、ブラジルの税務当局は、申告手続きに関する、より詳細なルールとよりわかり易いガイダンスをリリースする予定である。

結論

この税務と外貨規制に関する特別制度は、ブラジルに居住する個人及び企業に、申告されておらず、除外された、あるいは、不適切に申告された、諸外国で保有する財産について、当該財産に関する税金とペナルティを支払うことで、財産の本国送還または合法化を認めるというものである。この新しい制度は、最近のブラジル税務当局の税務コンプライアンスを向上させようとする主導に連動しており、OECDの課題に従うブラジルの規制を実行するという宣言にも連動している。

なお、ブラジル税制に従い、過去正しく財産を報告、申告してきた日系企業については、今回の新法による影響はないと思われる。

日本人移民の霊的父 ドミンゴス 中村長八神父



青木 勲
(マリア会日本地区 地区長)

1977年9月4日、カンピーナスのピラ・コーポス国際空港からブラジルに入国し2011年2月7日に帰国するまでの33年間一宣教師として貴重な体験をさせて頂いた。苦難の時期もありはしたが今は喜びと感謝の気持ちで一杯である。2008年、サン・パウロのカテドラルでオディロ大司教と日本人と関係深い7名の司教様と一緒に「日本人ブラジル移民百周年記念ミサ」を捧げ、一世紀に及ぶブラジルから受けた支援と恵み、日本人移民の不屈の精神と結束力を神と聖母に祈念したことは忘れがたい思い出の一つである。今は日系のジュリオ赤嶺司教が生まれ、日伯司牧協会の会長を勤めたりノ司教、会計であったマメディ司教に次ぐ快挙として嬉しい限りである。でもこの間多くの宣教師がブラジルの土になった。現在も20数名の日本人宣教師（司祭・修道者）が高齢にもかかわらず各地で黙々と生き続けている。私は、今日本から現場にいる宣教師達に心からの声援を送りたい。歴史を見れば歴然と神の計り知れない御手を観る思いがする。

遡って1908年、笠戸丸で新天地を求めてきた最初の移民の中に熱心なカトリック信者がいた。出身地は、九州と沖縄を中心に殉教者や福者の血を継ぐ伝統的な信者であった。言葉は分らなくてもミサには万難を排しても参加する覚悟で、長い道のりを教会に通い続けていた。この異様なまでの東洋の信仰者の熱心さに気付きレデンブートル会員のヒューパウエル師が、1922年ローマの信仰公布省に、文部省経由で邦人司祭の派遣方を依頼したのである。カトリック教会の黎明期、東京と長崎の2教会管区でも邦人司祭を海外に派遣する余裕はなく諦めようとした矢先、当時既に57歳のドミンゴス中村長八神父が名乗り出た。長崎で旅券を準備し、1923年6月11日神戸港を郵船河内丸で出帆して、インド洋・喜望峯経由で遂に8月23日ブラジルのサントス港に投錨した。早速リオ・デ・ジャネイロのエンリコ・ガスバリ教皇大使に拝謁しブラジルでの宣教許可を取得し、時の在ブラジル大使の田付七太氏を表敬し、根拠地ボツカツに直行した。旅荷を解くなりその翌日から、サン・パウロ州に散在する日系人植民地の訪問宣教を開始し

た。パウルーを起点にノロエステ沿線、アルトパウリスタ沿線、モジアナ沿線、アルト・ソロカバナ沿線、首都サン・パウロからサントス街道、リオ街道のドゥツラ沿線の町とほぼサン・パウロ州全域を踏破し、更にはマツト・グロッソ州の首都カンボ・グランデ、またパラナ州のロンドリーナ、マリंगा地域にまで脚を伸ばしたのである。灼熱の太陽の下、黒いスータン（司祭の長い着物）に、重さ30キロずつの生活用品と聖具（典礼用品）が入った振り分けの行李を前後に担ぎ、町から村へと、宗旨の如何を問わず日本人植民地を訪ねて求めて大荒野を歩き続けた。恵まれた体躯とは言え、交通と衛生事情の悪い時期、毒蛇やマラリア等の自然災害はもとより追剥による人身災難にも遭うことも度々あった。その結果皆から「日本人移民の心の父」として敬慕された。晩年、アルバレス・マシャード市のグアイサラの教会で信者の世話をして司祭職を全うした。彼の靴の両底に大きな穴が開いていたのが印象的である。17年間の受洗者数は、1750人に達し、聖フランシスコ・ザビエル学園の創立にも参与している。帰天の2年前1938年に、国民使節カトリック信者の山本信次郎海軍少将が中南米歴訪中サン・パウロの司教館でピオ11世から下賜された「グレゴリオ大褒章」を拝受した。時の教皇が異国の地で布教する老神父に示された異例な賛辞である。1940年3月14日、訃報に接した市長は、中村神父が日系人だけではなくブラジル人にとっても偉大な司祭であったことから日本人墓地ではなく、ブラジル人用墓地の一等地に墓碑を建て末永く恩人として称えることを決めた。今も「モンセニョール中村通」が墓地へのアクセスである。2002年8月13日、日伯司牧協会とブレジデンテ・プルデンテ教区が隣接する6司教との合意で「ドミンゴス中村長八神父列福調査委員会」を立ち上げ、バチカンで「神の僕」として継続調査中である。日本のカトリック教会は、戦国武将のユスト高山右近の列福式を来年2017年2月7日に大阪で挙行することを発表した。次はぜひ、日本人の移民の父「ドミンゴス中村長八神父」の列福に漕ぎつきたいと本誌で彼の紹介をさせて頂いた。



デジタル時代にこそ必要なカフェ屋の主人

唐木田真里子
(フリージャーナリスト)

約20年前にブラジルにきた当初、どうしてコーヒー大国におしゃれなカフェテリアがないのか？と嘆いたものである。パン屋の居心地悪い折りたたみ椅子に座るか、軽食店のカウンターで立ち飲みといった具合である。しかもコーヒーはただ濃いだけのどろどろ状態に山ほどの砂糖を入れる。「おいしい豆は全部輸出してしまうから、砂糖はまずさをごまかすため」などと論じられたものだった。

そんな時、同僚の勧めで毎日通うようになったのが、職場近くの間口一間程の立ち飲みカフェ屋である。オフィス街ということで、朝から夕方まで人の出入りは絶えない。美味しいコーヒーを飲む他にもうひとつの楽しみは店の主人との会話である。朝はまず前日のサッカーの試合の結果から始まる。自分のひいきのチームの勝ちを喜び、相手をぼろくそに言う討論会。昼は職場の愚痴もある。「おやじ、聞いてくれよ。俺の上司がさあ」という具合。女性客も多く、こちらは「ねえねえ、ちょっといい事あったんだ」と自慢話もある。

時は流れ、約10年前からブラジル国内でグルメカフェとい

う最高品質が出回るようになり、コーヒーの専門家バリスタが揃えたおしゃれなカフェテリアが登場し始めた。長年待ち望んだ店のはずなのに、行ってみると感じるのは違和感ばかり。メニューはタブレットで選び、お客は皮張りソファに身を沈めスマホに熱中。なぜかこちらまかしこまってしまう。

馴染みの店のエスプレッソカフェの値段は、15年前の1レアルが今では3.90レアルである。賃貸料や光熱費、従業員の賃金、税金の上昇に加え、最近は約6割の人が外での飲食を節約しているという。主人は「お金じゃないよ、この店が好きなんだ」と明るく言うが、経営は苦しいに違いない。

夫が家で延々とサッカーの話をすれば妻はうんざり。職場で愚痴や自慢話をすれば、嫌な奴とうとまれる。嫌なことはすっきりさせ、楽しみは倍にしてくれる店の主人の存在は何にも代えがたい。スマホのチャットで育った若者が、将来、聞き上手な店主になれるわけがない。全国にいるであろうこのような小さな店の主人はそのうち減びてしまうのか？これこそブラジルの危機である。

ジャーナリストの旅路

両国の架け橋に

宮ヶ迫ナンシー理沙
(フリージャーナリスト)

いまこの原稿を南米大陸史上初の五輪開催場所となったリオデジャネイロで書いている。祖父母の代でブラジルへ移民した家族のもとに生まれ、いわゆるあのデカセギ時代の始まる90年代の初頭に家族とともに日本へ渡り、日本で教育を受けた私にとって、ブラジルは長年心の奥で思い続けてきた場所だ。

学生時にはサンパウロ市南部のモンチアズールというファヴェーラでNGOの活動に参加し、2013年から2014年にかけて来た時は邦字新聞のニッケイ新聞で記者として、そしてW杯の取材アシスタントとして仕事をさせてもらった。日本ではブラジル音楽などを中南米の音楽を中心に紹介をする音楽雑誌の編集部で勤め、2国の間で居場所を少しずつ確立してきている。今年は再び五輪取材のために訪れたジャーナリストたちの下支えをするために、ブラジルにきている。この歴史的瞬間を見逃したくなかったから。

故郷でこの歴史的瞬間に立ちあえるのは、言葉にならない感慨深いことだ。周囲を見渡せば、日本で子ども期を過ごした同じような背景の複数の友人たちが、日本選手をサポートのために、または日本のメディアの取材のコー

ディネートを、宿泊などの滞在のサポートなど、この一大行事に関連したさまざまなところで活躍をしている。「両国の架け橋になりたい」そう願ってこの場所にたどり着いた人たちだ。

ただし、間に立つということは容易なことではない。報道の世界では、日々起こる暴力的な事件をセンセーショナルに報じようとするメディアと、その背景にある事柄、社会事情を含む情報を届けて欲しいと願うこちら側の意図は汲んでももらえないことが多い。

豊かに見えるがこの国は、社会的に発展途上であることを忘れてはならない。事象だけを報じれば、とんでもない国だと言われてしまう。それには理由があるのだから。

開会式を見たところある著名人のコメントが心に残った。「今までに見たことのない人肌感のある開会セレモニーだった」と。

人肌を感じられる、人間味のある国民性はこの国の宝である。だが、方向性が変わればそれは無秩序を生み出す根源でもある。2国の間に立とうとしたとき、その人間味と無秩序の絶妙な平衡感覚を失わずにいたいとあらためて感じた、五輪の開会式だった。

ラテンアメリカ文学英訳の巨匠 グレゴリー・ラバッサの死

岸和田仁（『ブラジル特報』編集人）



翻訳大国と自称している日本における翻訳書は、学術書であれ文学作品であれ、ハードカバーはもちろん文庫・新書でも、巻末に解説と訳者あとがき、が付されるのが“常識”である。明治以降、欧米の学問、思想や文学をひたすら学び、輸入することに注力してきた国民を有する国では、横文字を日本語に翻訳できるノウハウは特殊技能とみなされ、翻訳者の社会的ポジションは低くなかった。つまり、翻訳者の人格が高く評価されてきたから、編集者はその翻訳者に解説やあとがきを“お願いして書いていただく”という伝統が形成されたといってよい。

翻って、日本人がいまだにその国の文化も経営学手法も優れたものとして崇拜しがちな米国における翻訳文化事情は如何なものだろうか。これが意外なことに翻訳者への評価は決して高くないのだ。自国の言語がたまたま世界標準になっていることへの自惚れから、非英語圏の文学や思想を無理して学ばなくてもよい、と他国文化への無関心（と並行してアメリカ文化 No.1 信仰）を再生産してきたからだろう。例えば、ペーパーバックの翻訳本には翻訳者の名前が小さく表紙に印刷されているだけで、訳者あとがきも訳者略歴紹介も全くないのが普通である。外国文学の英語への翻訳をやる人材なぞ、珍しくないといふからだろう。

そんな翻訳文化軽視の国でも、例外的に尊敬を集める翻訳名人が少なからずいる、というのも厳然たる現実である。それは単に単語を訳すというのではなく、オリジナル・テキストの匂いを巧みかつ自然な英語の文章に変換できる、職人氣質の翻訳家である場合だが、スペイン語圏やポルトガル語圏の文学を英語に翻訳する世界で、卓越した存在感を示してきたのが、巨匠といえるグレゴリー・ラバッサ（1922～2016）であった。そのラバッサが、6月13日、米国コネチカットで亡くなった（享年94歳）。秘かに敬愛していた筆者としては、この巨匠の業績を改めて再考しておきたいと思う。

父親はキューバ人という家庭環境で育ち、学生時代からロマンス諸語を学んだラバッサがコロンビア大学に提出した博士論文は「1888年以降のブラジル文学における黒人」であった。ラテンアメリカ文学を講じる大学教師業と並行して翻訳も精力的に取り組んだ彼にとっては、スペイン語のみ、ポルトガル語のみ、といっ

た縦割り発想はなく、どちらの言語とも自由に“格闘”したのであった。

ラバッサがスペイン語やポルトガル語の翻訳家として有名になったのは、なによりもガルシア・マルケスの『百年の孤独』英訳版を1970年に刊行してからだ。というのも原作者マルケスが、「ラバッサの英訳のほうが私のスペイン語原文よりも優れている、なにしろオリジナルよりもわかりやすいのだから」と絶賛発言したこともあって、ラバッサ訳は一般紙誌でも大きく取り上げられることになり、商業的にもベストセラーになった。さらにコルタサルやヴァルガス・リョサの翻訳との相乗効果もあって、いわゆる「ラテンアメリカ文学ブーム」が英語圏でも1970年代に入って広まったが、このブームが起きたのは、まさにラバッサという翻訳名人のおかげだといっても過言ではない。

主な翻訳作品を列記すると、マルケスでは、『百年の孤独』、『落葉』、『族長の秋』、『予告された殺人の記録』、リョサは『ラ・カテドラルでの対話』、コルタサルは『石蹴り遊び』など、ブラジル文学作品では、マシャード・デ・アシス（『プラス・クーバスの死後の回想』、『キンカス・ボルバ』）、ジョルジ・アマード（『砂の戦士たち』）、リスペクトール、ポルトガル作家ではアントニオ・L・アンツネス、というように実に広範囲に亘っている。

たとえば、作家・批評家スーザン・ソントグが、晩年になって「ラテンアメリカが生み出した最大の作家で、ルイス・ボルヘスをも超越している」とマシャード・デ・アシスを高く評価したが、これもラバッサの英訳があったからこそであった。

筆者がラバッサの英訳本をきちんと読了したのは、ブラジルの代表的人類学者ダルシー・リベイロ（1922～1997）が晩年心血を注いだ主著『O Povo Brasileiro（ブラジル国民）』（1995年）の英訳版『The Brazilian People』（2000年）であった。この著作は、歴史人類学の視点から「いくつものブラジル」が形成されてきた経緯を解説し、「我々ブラジル人は、肉体も精神も混淆した国民なのだ」と主張した名著であるが、原著を随分時間をかけて読んだ筆者が英訳版を入手して読了した時の感想は、「原著もすごいが、英訳版のほうが、文章がこなれていてずっと読みやすい、原文より上じゃないか」というものだった。

政府による経済目標発表

7月7日、伯政府（バジリーヤ文官長、メイレレス財務大臣及びオリベイラ企画予算大臣代行）は、2017年度のプライマリーバランス目標の変更等（連邦政府はGDP比▲2.0%、州及び市政府も含めた政府全体では同▲2.1%）を発表した。概要以下の通り。

（1）プライマリーバランスの算出の前提となる、各種経済指標の政府見通しは以下の通り。

（ア）GDP成長率

2016年／▲3.1%

2017年／1.2%（2017年の市場予測値は1.0%）

（イ）名目GDP

2016年／6兆2440億リアル（約187兆円、1リアル30円として計算）

2017年／6兆7817億リアル（約203兆円）

（ウ）インフレ率（12か月累計）

2016年／7.2%

2017年／4.8%（2017年の市場予測値は5.4%）

（エ）政策金利（Selic, 年間平均）

2016年／13.9%

2017年／11.8%（2017年の市場予測値は11.7%）

（オ）為替（対ドル, 年間平均）

2016年／3.66

2017年／3.73（2017年の市場予測値は3.61）

（カ）石油価格（年間平均, 1バレル当たりの価格）

2016年／45.7ドル 2017年／52.6ドル

（キ）最低賃金

2016年／880.0リアル（約2万6000円）

2017年／945.5リアル（約2万8000円）

（ク）給与上昇率（名目）

2016年／3.3% 2017年／7.3%

（2）政府財政見通し

（ア）歳入（GDP比）

2015年／13.01% 2016年／12.58% 2017年／12.42%

（イ）義務的歳出（GDP比）

2015年／15.2% 2016年／15.4% 2017年／15.6%

（ウ）裁量的歳出（GDP比）

2015年／4.2% 2016年／4.4% 2017年／3.9%

（エ）年基金収支（GDP比）

2015年／▲1.5% 2016年／▲2.3% 2017年／▲2.7%

（3）プライマリーバランス目標

（ア）2015年度の連邦政府のプライマリーバランスは▲1167億リアル（約3.5兆円, GDP比▲2.0%）、2016年度の目標

値は▲1705億リアル（約5.1兆円, GDP比▲2.8%）であり、現状のまま追加的措置を講じなければ、2017年度の連邦政府のプライマリーバランスは▲1944億リアル（約5.8兆円, GDP比▲2.9%）に達する見込み。

（イ）それに対して、財政調整政策の実施によって、554億リアル（約1.7兆円）分の赤字を削減することとし、2017年度の連邦政府のプライマリーバランス目標を▲1390億リアル（約4.2兆円, GDP比▲2.0%）とする（財政調整政策の内容は未発表）。

7月25日のフォーリャ紙掲載のメイレレス財務大臣のインタビュー記事より抜粋

ブラジルにおける財政問題は、憲法そのものも含む構造的なものである。近年の歳出削減の試みは裁量的歳出に対してのみであり、削減余地は非常に小さいものであった。行政府の意思で年金歳出を削減することはできず、教育及び保健分野の投資も削減することができない。さらに、給与の削減も憲法で禁止されている。そのため、我々が提案しているような構造改革が必要である。公的歳出に関する改革は、1988年の現行憲法の策定以来のことである。

第2四半期の鉱工業生産は前期比1.2%増加

8月3日付け、ヴァロール・エコノミコ紙によれば、IBGE（地理統計院）の発表では、第2四半期の鉱工業生産は前期比1.2%増となった。その要因は、**1）**在庫調整が進んだこと、**2）**企業経営者の景況感が改善したこと、**3）**ドル高リアル安による輸出増、であった。セクター別にみると、自動車（トラック含め）セクター8.4%増、医薬・医療機器セクター4.7%増が目立つ。IBGEの調査担当部長によれば、金属セクター、食品セクター、衣類・履物セクターが輸出増の恩恵を受けたが、内需の落ち込みをカバーするまでには至っていない。

農業部門の輸出好調

今年上半年の農産品輸出総額は450億ドルに達し、前年同期比4%増で、全輸出総額の49.9%を占めた。ちなみに上半期の全輸出総額は前年同期比4.3%減であった。また農産品輸入額は61億ドルであったので、農産部門の上半期貿易黒字は389億ドルとなり、前年同期比7.5%増であった。

主な部門別にみると、大豆は輸出数量38.5百万トンと前年同期比19%増、金額では172億ドルで前年同期比7.8%増、チキン（加工品含む）は、数量では2.228百万トン（前年同期比14.15%増）、金額では33億ドル（前年同期比1.04%減）、砂糖アルコールは、金額で45億ドル（前年同期比15%増）、コーヒーは、24億ドル（前年同期比マイナス24.4%）、となっている。

新刊書紹介

◆◆◆◆◆ 新刊書紹介 ◆◆◆◆◆

『死体泥棒』 (パトリシア・メロ著、猪俣和夫訳)

コカイン密輸の小型飛行機がパラグアイ川に墜落。その“お宝”を盗み取った主人公は、仲間たちとつるんでイイ生活を送るはずだった。ブラジルでは、よくありそうな麻薬がらみの話が思わぬ展開に。映画脚本家として有名な作家によるサスペンス小説だ。翻訳版がドイツでミステリー大賞を受賞したおかげで同国でベストセラーへ。邦訳も独語訳からの重訳なので、時に驚くような珍妙な誤訳を見つける楽しみもあり。
(ハヤカワ文庫 2016年1月 272頁 700円＋税)

『現代人の国際社会学入門』 (西原和久・樽本英樹編)

アンジェロ・イシ教授の論稿 (第13章)「ブラジルから考える南米のトラ

ンスナショナリズム」は、オリンピックとサッカーの事例からブラジルをめぐるトランスナショナルな人の移動を考察したうえで、日系移民や在日ブラジル人問題についてもコンパクトに再考している。人を受け入れる側面と送り出す側面、の両面を有するブラジルのダイナミズムを再確認してから、他の所収論稿を読めば、変容する世界の多様性がみえてくる。
(有斐閣 2016年5月 312頁 2,300円＋税)

『NHK取材班 アマゾンを撮る男たち』

“BBCを超える”意気込みで、NHK自然ドキュメンタリー番組を作ってきたと自負するスタッフによる、「NHKスペシャル 地球! ふしぎ大自然」(2001年～2011年)、「大アマゾン 最後の秘境」(2016年～)の取材裏話を収めたムック本だ。ピラルクーの水中撮影、オオカワウソ親子の近接撮影、さらにはセラード・エマス国立公園の光るアリ塚取材(ナビゲーター福山雅治)など、ブラジルの生物多様性のスゴさを映像化したのは、快挙だ。
(TJ Mook 宝島社 2016年5月 112頁 1,000円＋税)

『帰国するブラジル』(渋谷敦志写真集)

報道写真家としてアフリカ・アジア各

国の紛争、少数民族問題から東日本大震災復興活動まで写真媒体や文章を通じて表現し記録してきた著者の、「はじまりの場所」は1996年のブラジルであった。20年に亘って交流してきたブラジル各地の庶民の生活シーンを記録したモノクロ写真群から読み取れる“現実”はなんとも重い。はしがきとして付された今福龍太教授のイントロ・エッセイも魅力的。
(瀬戸内人 2016年7月 160頁 3,700円＋税)

『リオデジャネイロに降る雪』 (福嶋伸洋著)

フランス文学研究からブラジル文学研究に“宗旨替え”した若き文人のリオへのサウダージ(郷愁)を綴った紀行エッセイ集。ペルエポック期のリオにおけるカーニバルに思いを馳せ、ヴィニシウスやトム・ジョビンが創造した「イパネマの娘」物語を再解釈し、若き堀口大學のリオ体験(リオでパリを夢想した!)を追体験していく。リオに雪が降ったら世界は終わりだ、との“常識”への文学的メタファーとも読める、なんとも素敵な散文集だ。
(岩波書店 2016年7月 146頁 1,800円＋税)



日本ブラジル中央協会 からのお知らせ

Association Information

協会イベントのご案内

参加のお申し込みは、協会ホームページお申し込みフォームにてお願いします。

9/23

写真家 渋谷敦志氏 講演会

演題：写真集『帰国するブラジル』を語る
ブラジルからアフリカ・アジアへ、そしてまたブラジルへ

フォトジャーナリストとして、アフリカのエイズ、紛争、貧困に苦しむ民衆を写真と文字で記録、ミャンマーやカンボジアの民族問題をレポートし、3.11東日本大震災の復興支援をフォローするなど、活動の範囲を広げている渋谷氏。20年越しのブラジル体験を写真集にまとめ、『帰国するブラジル』を刊行。ブラジルからスタートしてブラジルに帰国した渋谷さんの活動をフリーに語っていただきます。

日時：2016年9月23日(金) 14:00~15:30

会費：会員 1,000円 非会員 2,000円

場所：虎ノ門法経ホール

住所：東京都港区西新橋 1-20-3 虎ノ門法曹ビル B1F

アクセス：JR「新橋」駅 比谷口 徒歩7分、東京メトロ銀座線「虎ノ門」駅 1番出口 徒歩5分、都営三田線「内幸町」駅 A3出口 徒歩3分

9月開講

ポルトガル語秋期講座 申込受付中

充実した講師陣により「全くの初心者コース」～「上級コース」まで全5コース開講予定

初めてポルトガル語を勉強してみたいとお考えの方、9月から始めませんか？

9月から始まる秋期ポルトガル語講座では、ポルトガル語が全く初めての方のために「全くの初心者コース」(簡単な挨拶や、物の名前、数字の数え方など、基本的な言語からチャレンジします)、その他レベルに応じて全5コースを開講します。

■受講料

全くの初心者・初級Ⅰ [会員] 35,000円(税込)
初級Ⅱ・中級・上級 [会員] 32,500円(税込)

■会場

日本ブラジル中央協会 事務局
東京都港区新橋 1丁目18-2 明宏ビル本館5階

■申込方法

協会ホームページの申込フォーム(<http://nipo-brasil.org/portugal/request/>)よりお申込ください。
※受付は申込先着順です。

——— 皆様のご入会、心よりお待ちしております ———

法人・個人

新規会員募集中

会員数 2016年8月現在
法人会員 約122社
個人会員 約270名

当協会の活動目的「日本・ブラジル両国間の相互理解、友好関係の促進に寄与する」にご賛同・ご支援頂ける方に、会員となることをご検討いただければ幸いです。

会員特典

1. 協会会報「ブラジル特報」の無料配布
隔月発行、年6回配布。
2. 会員価格にて、講演会等のイベント、ポルトガル語講座に、参加できます(会員限定イベントへも参加いただけます)
3. 会員交流懇親会へ参加いただけます
4. ホームページにて、会員限定情報をご覧いただけます

年会費

入会金は不要です

法人会員 1口 20,000円 / 個人会員 1口 10,000円
(2口以上) (1口以上)

お申込みはこちらから

《日本ブラジル中央協会公式HP》
<http://www.nipo-brasil.org>

日本ブラジル中央協会 検索

「ブラジル特報」は一部有名書店の店頭でも入手できます。

!!「びっくり豆知識」!!

「大国」はメキシコに負けてはいけない

英国のEU(欧州連合)離脱の際、ざっと1000拠点の日系進出企業の活動に影響が出ると報道されていた。数字を聞いて「意外に少ないな」と思った。日系企業のアジア傾斜は勢いを増しており、およそ3万3000拠点の中国、4000拠点以上のインドは別格として、タイ、インドネシア、ベトナム、フィリピン、マレーシアなども英国の1000拠点を上回る。

対する中南米はどうか。ずっとアジアの後塵を拝してきたが、ここへきてメキシコが「中南米の雄」として存在感を増し、アジアを急追している。調査主体の違いで数字は大きく変わるが、外務省の「海外在留邦人実態調査」の数字を使う。2015年版調査によると、メキシコへの進出企業数は957拠点(前年比17.6%増)で、ブラジルの705拠点(同1.0%増)を大きく上回った。すでに14年にブラジルを追い抜いていたが、わずか1年でこれほどの差がつくとは思わなかった。

その理由はメキシコへの自動車産業の集積である。比較的景気の良い北米向けの需要が堅調で、老舗の日産、そしてマツダ、ホンダ、トヨタが積極投資をし、部品産業が追随する。経済混乱と政治不安が目立つブラジルを追い上げるメキシコのパワーは止まらない。むしろ進出企業の数だけで優劣を判

断するわけにはいかないが、こうなると「中南米の大国」はどこかという下世話な興味もわいてくる。

このままブラジルは沈んでしまうのか。「いやそんなことはない」と言うのはニューヨーク在住の写真家田中克佳氏。本誌の表紙を担当していて、いつもブラジルの最新事情をウォッチしている彼が日本で講演会を行った。「リオ五輪はうまくいくのか」と多くの人に聞かれるが、そのたびにこう答えたという。

「リオは2～3月に世界最大のカーニバルを開催している。五輪開会式程度は毎年やっているから心配する必要はない。マスコミのネガティブな報道に乗せられていけない」。その通りだ。やせても枯れても、資源と食料の増産余地がある「大国」のはず。堂々としていればいい。

アメリカがくしゃみをして風邪をひくのはメキシコで、ブラジルは影響なし。米大統領選の共和党候補、トランプ氏が「不法移民を入れないように壁をつくる」と言っているのもメキシコが相手だ。世界のGDP(国内総生産)ベストテンのブラジルはリオ五輪で厄落とした。「大国」は泰然自若といきたい。(W)

BRASILICAGRILL
CHURRASCARIA

ブラジル バーベキュー食べ放題
+ ビュッフェ

¥5,400 (税抜き/tax not incl.)

ALL YOU CAN EAT 食べ放題

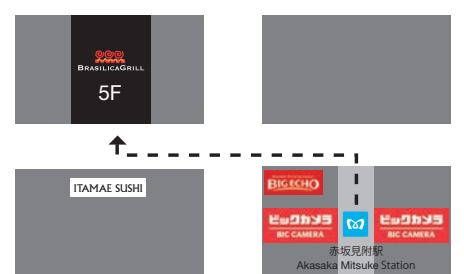
予約:
www.brasilicagrill.com

〒107-0052 東京都港区赤坂3-10-4 赤坂月世界ビル5階
Tokyo-to Minato-ku Akasaka 3-10-4 Akasaka Getsu Sekai Bldg. 5F

赤坂見附駅
徒歩2分

赤坂駅
徒歩6分

永田町駅
徒歩6分



溜池山王方面 Tameike Sannou 赤坂見附駅 10番出口 Akasaka Mitsuke EXIT 10 銀座線 丸の内線 青山一丁目方面 Aoyama Ichome Ginza Line Marunouchi Line



スペイン・中南米との架け橋として20年 スペイン語・ポルトガル語の イスパニカ

www.hispanica.org

ことばを学ぶ人にも、ビジネスマンにも、高品質で充実のサービスを提供いたします

通訳 翻訳

ビジネスから文芸まで経験豊富なプロがクオリティの高いサービスを提供

取扱い言語：スペイン語・ポルトガル語
英語・フランス語・ドイツ語
イタリア語・ポーランド語

語学スクール

初心者はもちろん、中・上級者向けコースも充実の溜池山王教室

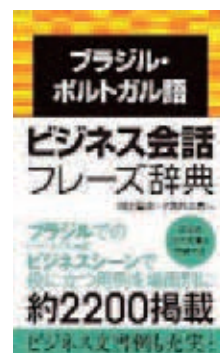
www.hispanica-academia.org

- ・通学
- ・通信添削
- ・オンライン※ポルトガル語は通学のみ

書籍の執筆・編集

赴任、出張にはこれ！

安心のカナ発音
英語付き。



ミニマム文法やミニ辞典も掲載。
三修社刊

中南米の情報提供

スペイン通信社EFEの情報をもとに
中南米の最新ニュースを日本語で

- ・中南米経済速報（週刊）
- ・政治・治安情報“CRONICA”
（月～金の毎日）

企業語学研修

ニーズに合わせた効果的な研修

粒ぞろいの講師が、ビジネスを成功に導く語学力習得をとことんサポート。実践的なコミュニケーション力を最大限引き出すレッスンをアレンジします。

(有)イスパニカ 〒107-0052 東京都港区赤坂 2-2-19 アドレスビル 1F（銀座線・南北線「溜池山王」8番 駅出口前）

Tel.03-5544-8335 Fax.03-5544-8336 hola@hispanica.org

ブラジル赴任の前に ビジネスで使えるポルトガル語を



ブラジルでビジネスや生活をする上で

欠かせないのがポルトガル語です。

BrAsia(ブレイジア)では、

赴任前と赴任後の語学研修を提供します。

「講師任せにはしない」

現地に精通したスタッフが進捗を管理します。

BrAsia (ブレイジア) 運営: 株式会社 漢和塾 〒104-0061 東京都中央区銀座1-16-7 銀座大栄ビル5階
TEL03-4360-8627
お問い合わせは E-mail: brasias@kanwajuku.com HP: <http://brasias-j.com/>

37年間
南米一筋

驚き！ 感動！！

魅惑のブラジルへの旅

ブラジルへのご旅行・出張は
創業 1979 年のアルファインテルにお任せください。

アルファインテルは南米系旅行会社で唯一の国際航空運送協会 (IATA) 公認代理店です。

航空会社との直取引につき、料金、座席確保に自信があります。

主要取扱航空会社：ユナイテッド航空、デルタ航空、ルフトハンザドイツ航空、エールフランス航空、エティハド航空、エミレーツ航空、カタール航空、アエロメヒコ航空、タム航空、ラン航空、アルゼンチン航空、ゴル航空、コパ航空、アヴィアンカ航空

アルファインテルはブラジル総領事館（東京、浜松、名古屋）の登録業者です。

観光や短期商用はもちろん、永住権取得や技術支援などの長期ビザもお任せください。

ご旅行・ご出張の際の現地のホテル、ガイド、車輛の手配も実績ある弊社にお任せください。

株式会社アルファインテル

(本社) 東京都港区新橋3-8-6 大新ビル3階

観光庁長官登録旅行業 第1835号

社団法人日本旅行業協会正会員/OTOA正会員

TEL: 03-5473-0541 FAX: 03-5473-0540

アルファインテル



e-mail : info@alfainter.co.jp



亀は万年、鉄は永遠。



鉄は、機能的な素材です。強く長寿命でどんな形もつくりことができ、古くなったら取り替えも利く。スクラップになっても、何度でも新しい鉄に生まれ変わります。新日鉄住金は、鉄のライフサイクルを見つめ、より錆びにくい鉄など、さまざまな可能性を追求。原材料から環境負荷の少ないものを選び、多くのエコプロダクツも開発してきました。一説では、鉄はその強度もまだ20%程度しか発揮されていないといわれています。もっとロングライフで、もっとエコロジーな鉄へ。私たちは世界最高の技術力で、秘められた鉄の可能性を引き出していきます。

鉄の「可能性」を考える。私たちはライフサイクルで環境を考えます。

世界の鉄へ しんにつつすみきん

 新日鉄住金